

活動報告

1 戦史関連研究会等

(1) 令和5年度戦争史研究国際フォーラム

令和5年度戦争史研究国際フォーラムでは、「冷戦期の日本の安全保障と朝鮮半島」をテーマとした。

日本の安全保障が朝鮮半島と密接な関係を持つことは言うまでもない。朝鮮戦争休戦70周年の節目を迎え、朝鮮戦争と日本との関係や、冷戦史のなかの日米韓関係などを取り上げ、冷戦期の日本の安全保障と朝鮮半島の関係について歴史的に考察した。

本フォーラムは、情報発信強化の観点から、オンライン形式にて開催された。

題 目	冷戦期の日本の安全保障と朝鮮半島		
実 施 日	令和5年9月14日(木)	場 所	オンライン
基調講演	「日本と朝鮮の戦略的連関—冷戦期のアメリカの視点」 マイク・モチヅキ (ジョージ・ワシントン大学日米関係部長)		
研究発表	第1部 朝鮮戦争と日本 「朝鮮戦争エスカレーションと西側陣営内での日本再軍備の位置づけ」 柴山 太 (関西学院大学教授) 「東アジア停戦体制と日本の位置—日本が戦った朝鮮戦争を手掛かりに」 南 基正 (ソウル大学日本研究所長) 「アメリカの戦略における朝鮮と日本 1945-1955」 マーク・ガリッチオ (ヴィラノーバ大学米国史部長) * 討論者 庄司 潤一郎 (防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官)		
特別講演	「朝鮮半島と日本の安全保障—その歴史的考察」 波多野 澄雄 (国立公文書館アジア歴史資料センター長)		

研究発表	第 2 部 冷戦史のなかの日米韓関係
	「韓国外交文書から見る沖縄返還前後の東アジア国際関係」 小林 聡明（日本大学教授）
	「米中接近と日韓安全保障関係—抑止と外交の調和は可能だったのか」 崔 慶原（常葉大学教授）
	「冷戦の終焉と日韓・日米関係」 添谷 芳秀（慶應義塾大学名誉教授）
	* 討論者 中島 信吾（防衛研究所戦史研究センター戦史研究室長）

（2） 日韓戦史研究交流

令和 5 年 11 月 28 日（火）、防衛研究所において第 22 回日韓戦史研究交流を実施した。毎年日韓で相互に開催している同交流は、令和 4 年 9 月 21 日（水）に韓国国防部軍史編纂研究所で行われた第 21 回交流から対面による開催が復活、防衛研究所戦史研究センターから研究者 2 名が参加したことから、今回は軍史編纂研究所の研究者 2 名を戦史研究センターが招へいし、日韓の研究者 4 名がそれぞれのテーマについて報告した。

庄司潤一郎主任研究官が「戦争の呼称について」を、韓国国防部軍史編纂研究所のリ・サンホ上席研究官が「朝鮮戦争期日系アメリカ人 2 世の捕虜尋問とその影響」を報告した後、石津朋之主任研究官が「政軍関係を考える——『ヒ首（あいくち）伝説』を手掛かりとして」を、韓国国防部軍史編纂研究所のナム・ボラム上席研究員が「1950 年 7 月 2 日、スミス特殊部隊に対する再評価」を報告し、いずれの報告についても日韓双方から多様な論点が提示され、活発な質疑応答と有意義な意見交換が行われた。

（3） 日独戦史研究交流

令和 5 年 11 月 20 日～24 日の日程で、第 5 回日独戦史研究交流がドイツのポツダム等で開催された。

日独間の戦史交流は平成 28 年 6 月、ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所（ZMSBw）所長以下 3 名が防衛研究所を訪問して以来、招へい及び海外出張により交互に戦史交流を実施してきた。令和 2 年度及び令和 3 年度は新型コロナウイルス感染症のため開催中止となり、3 年ぶりの開催となった令和 4 年度はオンラインでの研究交流であったが、今年度は 4 年ぶりに対面での開催が実現した。

今年度は ZMSBw からの招へいを受け、戦史研究室の小橋史行主任研究官と国際紛争史研究室の伊藤頌文研究員がドイツ側を訪問し、研究発表を行った。プログラムの初日である 11 月 20 日に「競争の時代における国際秩序の形成と維持：冷戦及び冷戦後の視点から」

と題した研究交流ワークショップが開かれ、第1部では伊藤研究員が「総合的安全保障システムの始動? : 冷戦後期における規範的価値をめぐる NATO 内の協調」、ZMSBw のクリストフ・ニューベル博士が「脅威と緊張緩和：西ドイツ国防省のソ連に対する認識について」をそれぞれ報告し、冷戦期の欧州安全保障に関する歴史的な観点から議論を行った。第2部では小橋主任研究官が「日米欧防衛協力の軌跡と展開：日米同盟と NATO との戦略的連携に向けて」、ZMSBw のヨハン・シュミット博士（陸軍大佐）が「ハイブリッド戦争と NATO」をそれぞれ報告し、冷戦後の NATO 及び欧州安全保障をめぐる現代的な視座からの議論が提示された。第1部、第2部ともに日独双方から多様な論点が提示され、活発な質疑応答と有意義な意見交換が行われた。

ワークショップに先立って ZMSBw 所長への表敬・懇談を実施して交流及び相互理解に努めたほか、11月21日はドイツ側の案内でドレスデンの軍事史博物館を訪問し、同国における戦史・軍事史について理解を深めた。また、22日及び23日はドイツ外務省政治文書館（PAAA）を訪問し、ドイツの公文書館の概要説明を受けるとともに、実際に PAAA が所蔵するドイツ外務省の歴史資料を閲覧する機会にも恵まれた。今回の訪問を通して、日独戦史研究交流の更なる発展と、両国の相互理解に寄与する機会が得られた。

(4) 研究会

実施日	題 目	講 演 者
2月13日 (月)	太平洋戦争におけるアメリカ陸軍の体験	ミズーリ工科大学教授 ジョン・マクマナス
3月13日 (月)	ベトナム戦争終結過程での軍事的エスカレーション(1969-1972)	二松学舎大学教授 手賀 裕輔
3月27日 (水)	東大文書館所蔵の日本陸海軍関係史料	東京大学准教授 森本 祥子
6月20日 (火)	中国が太平洋戦争から得た教訓——中国人民解放軍の戦闘力への影響	米戦略予算評価センター (CSBA) トシ・ヨシハラ
6月21日 (水)	中国海軍の起源——中国人民解放軍による最初期の沿海作戦	
7月10日 (月)	軍事情報から近代資料へ——外邦図の現状と学術的利用を考える	大阪大学名誉教授 小林 茂
	大陸における陸地測量部の測図	地図研究家 大堀 和利

12月5日 (火)	中国の A2/AD 能力が米国の戦力投射能力に与える影響——米国の地上航空戦力を中心に	ダートマス大学教授 ダリル・プレス
--------------	---	----------------------

2 戦後史関連の戦史史料編さん

戦後史関連の戦史史料編さんは、オーラル・ヒストリー（口述記録の作成）の編さんに取り組んでおり、本年度末に「日本の安全保障と防衛力（その 12）：元航空幕僚長・遠竹郁夫」、「日本の安全保障と防衛力（その 13）：元統合幕僚会議議長・石川亨」、「日本の安全保障と防衛力（その 14）：元防衛事務次官・佐藤謙」の刊行を予定している。

3 戦史史料の閲覧

防衛研究所は、戦史史料（旧陸海軍関係の公文書類等）を、平日及び土曜日（月 1 回）の 9 時から 16 時 30 分まで、戦史研究センター史料閲覧室において一般に公開している（土曜日に開館した場合は、翌週最初の平日は臨時閉館）。当面は新型コロナウイルス感染症対策のため閲覧には予約が必要である。

調査研究のために閲覧を希望する者は、予約をした後に、所定の手続きをとって誰でも閲覧することができる。予約・閲覧方法等については、防衛研究所史料閲覧室のホームページ (http://www.nids.mod.go.jp/military_archives/) を参照。また、一部の戦史史料については本ホームページから閲覧が可能となっている。

令和 5 年の閲覧者総数は 1,685 名であり、月別閲覧者数は下表のとおりである。

月	1	2	3	4
閲覧者数	121	105	139	117
月	5	6	7	8
閲覧者数	133	151	155	185
月	9	10	11	12
閲覧者数	149	121	152	157

4 レファレンス

防衛研究所は、主に戦史研究センター史料閲覧室を窓口として、戦史史料の検索、特定の戦史史料の内容に関する情報提供、戦史史料に関する参考文献及び専門的調査機関等に関する情報提供を行っている。

令和5年のレファレンス統計は以下のとおりである。

(1) 要求件数

総件数は838件であった。月別件数は下表のとおりである。

月	1	2	3	4
要求件数	45	66	69	56
月	5	6	7	8
要求件数	65	81	73	92
月	9	10	11	12
要求件数	70	69	79	73

(2) 海外からの要求件数

総件数は22件（閲覧者数含む）であった。

国・地域	韓国	中国	アメリカ	ブラジル	ドイツ
要求件数	5	9	5	1	2

(3) 質問内容

質問内容	戦争指導	作戦戦闘	部隊史	個人歴	制度	兵器
要求件数	9	45	136	194	34	55
質問内容	軍事施設	服装記章	教範用語	教育訓練	情報	兵站補給
要求件数	34	9	14	9	2	3
質問内容	研究開発	戦史史料	自衛隊史	戦史叢書	外国戦史	その他
要求件数	2	213	1	8	3	67

(4) 陸海軍別

質問内容	陸軍	海軍	共通	その他
要求件数	452	234	96	56